

V洋05-1

「菊花の香り～世界でいちばん愛されたひと～」 ★★★

★★

2005（平成17）年9月27日

ビデオ鑑賞<自宅>

監督：イ・ジョンウク

脚本：キム・ヒジェ イ・ジョンウク

原作：キム・ハイン『菊花の香り』（PHP研究所刊）

ヒジェ/チャン・ジニョン

イナ/バク・ヘイル

チェ・ジョンナン（女医）/ソン・ソンミ

タキコーポレーション、リベロ配給・2003年・韓国映画・109分

<魅力的な先輩は女性部長>

外国での留学生生活を経た後韓国に戻り、夢いっぱい大学の門をくぐったイナ（バク・ヘイル）。彼は反強制的（？）に「歴史研究会」というサークルに勧誘されたが、そこには美しい先輩の女性部長ヒジェ（チャン・ジニョン）がいた。彼女こそ、地下鉄で出会った運命の女性、「菊花の香り」の人だ。地下鉄内で座席を1人占めて寝ていた男に対して、その前に立つ妊婦のために、「おじさん席を空けてよ！」と堂々と交渉していたのが彼女。その自信に満ちた姿勢と、下車後すれ違いざまに揺れる髪が残っていたさわやかな菊花の香りは、もはや彼には忘れられないものになった。

<印象的な愛の告白は・・・？>

サークル恒例の夏の合宿は、ある小さな島で。韓国語はしゃべれるものの、多少理解力不足（？）のイナは、船着き場の意味をまちがえたため、集合時刻に遅刻。部長の責任としてイナを待っていたヒジェは、いきなりイナの足に蹴りを入れたが、船上での2人旅（？）はイナにとって至福の時・・・？そして、合宿中に海の中で溺れかかったヒジェを助けたイナは遂に「愛の告白」を・・・。「誰だって最初は先輩に憧れるものよ」といなすヒジェに対して、ここで引き下がっては男がすたるとばかり、強引にキスを挑んだイナ。しかし、ヒジェはこれも冗談でかわし、今度はイナの腹にきついパンチを一発。そして「本当の愛は、相手の人生まで背負うことよ」という重々しい人生訓を・・・。

大学に入学した当時、自由で開放的な雰囲気の中、サークルの美しい先輩に憧れた経験は男なら誰もが持っているはず。そんな青春の一コマは、日本でも韓国でも同じ・・・？

<ヒジェには恋人が、他方イナは兵役に・・・>

美しいヒジェには大学時代から既に恋人がいた。そして大学を卒業したヒジェはデザイナーとして活躍し、その男性と婚約することに・・・。その間、イナは手をこまねいてじっとそれを見ていたのか・・・？結論から言うと、客観的にはそのとおり。もっともその背景には、韓国の男性には避けることのできない「兵役」の義務があった。しかしそれ以上に、苦しみながらもヒジェのことを忘れようともがき苦しむイナの姿が印象的・・・？

<あの元気なヒジェが屍状態に・・・>

菊花の香りやその清楚な美しさがヒジェの魅力だが、それをより際立たせているのが、ヒジェの元気で気丈な、イケイケドンドンの（？）性格。あの夏の合宿で海の中で溺れそうになったのも、あるトラウマによって海に入れなくなっているはずのヒジェが、子供との約束を守るため向こう見ずにも1人海の中に入っていったせい・・・？そんなヒジェだから、サークルでは部長として「歴史研究会」を牽引していたし、卒業後も社会人として男社会の中でバリバリと・・・。

こんな元気いっぱいのヒジェを突然襲った不幸は車の事故。これによって同乗していた婚約者と婚約者の両親を一時にして失うとともに、ヒジェ自身も瀕死の重傷を・・・。再三の手術によって何とか一命をとりとめたものの、この事故の後ヒジェの精神状態はボロボロとなり、あれほど元気だったヒジェは生ける屍状態に・・・。

<ヒロインは魅力いっぱい！>

ヒロインのヒジェを演ずるのは、日本の人気テレビドラマ『29歳のクリスマス』の韓国版ともいえる『シングルス』（03年）で、アメリカ髪型の八頭身美人の主人公を演じたチャン・ジニョン（『シネマルーム8』参照）だが、この『菊花の香り～世界でいちばん愛されたひと～』でもその清楚な美しさは抜群。学生時代の元気澆刺としたヒジェと、イナの告白をずっといなし続けるお姉さんタイプのヒジェ。交通事故後生きることへの希望を失い、屍状態となったヒジェ。そして、あの島の合宿でのイナからの愛の告白から7年を経て、今やっとイナとの結婚によって幸せを掴んだヒジェ。さらに最後に、美人薄命という運命（？）の中、懸命に生きようとするヒジェ。そんなヒジェを演ずるチャン・ジニョンのさまざまな魅力がスクリーンいっぱいに・・・。

<一歩退いた恋のキューピットも魅力的！>

他方、このヒジェと同じサークルに属する同級生の親友で、卒業後産婦人科医となる女性チェ・ジョンナンも魅力的。このチェ・ジョンナンを演ずるのは、『木浦は港だ』（04年）で美しい女性検事役を演じていたソン・ソンミ（『シネマルーム8』参照）。

チェ・ジョンナンは、生ける屍状態となっている親友ヒジェを励ますとともに、イナに対してもハツパをかけ、結局「愛のキューピット」の役割をきっちり果たすことに・・・。こんなチェ・ジョンナンは今も独身。大学時代のイナは、サークル仲間の女性たちの人気も高かったが、イナの気持はヒジェだけに一筋。チェ・ジョンナンはそんなイナをホントは愛していたのだが、彼女は決してそれを口に出すことなく、淡々と自分の役割を・・・。

こんなチェ・ジョンナンは、映画の後半からラストにかけて、産婦人科医としてさらに大きな役割を果たすことになるので、この魅力的な「恋のキューピット」さんにも是非注目を・・・。

<こんなにやさしい韓国男性はいるの・・・？>

もちろん性格は人それぞれだし、女性に対する想いも、一途な人や浮気的な人などいろいろ・・・？今の日本社会では一般的に男性がやさしくなっているが、韓国はそれほどでもないのでは・・・？韓国は昔の日本と同様、男尊女卑の思想が強く、今でもそれは日本以上に根強く残っているうえ、概ね韓国男性の性格は荒っぽい・・・？したがって女からフラレたら、「それがどうした！」と逆に開き直ってしまうタイプが多いのでは・・・？そういう一般的な韓国人の男性像に照らすとイナはかなり異質だが、それは外国留学の体験のせい・・・？

それにしても大学入学時に胸をときめかせた女性を、片思いと知りつつ卒業後も思い続けるというのは、私の体験に照らしてみても、かなり驚異的・・・？ヒジェが言っていたとおり、「その胸のときめきは一時的なもの」であるのがむしろ普通では・・・？

したがって、これほど一途に想われ続けられたら、あれほど屍状態となっていたヒジェだって、その気持が揺れ動き、遂にイナとの結婚を決意したのも当然・・・？そして結婚後の2人の生活を見ていると、幸せそのもの。ある日、部屋の中で大声で笑うヒジェを見て涙するイナの姿を見ていると、こういうすばらしい愛の形も（例外的に）あるものだと感心しきり・・・。しかし、神さま、仏さまはいじわるなもの・・・？こんな2人の幸せがずっと続かないのが世の中というものだ。

さて、物語はその後どのように展開していくのだろうか・・・？

<テレビとラジオの効用は・・・？>

今やテレビに取ってかわられた感のあるラジオだが、実はそうでもない。ラジオが災害時に果たす貴重な役割が再認識されているうえ、『ヤンリク』や『ヤンタン』など私の学生時代に大人気だった若者向けの深夜番組にかわって、今では『ラジオ深夜便』などが大人向けに根強い人気・・・？騒々しいばかりのテレビのバラエティ番組に疲れたおじさんには、かえって1人静かに聴くラジオの方が向いているのでは・・・？

昔からずっと一貫して人気があるラジオ番組はリスナー参加型のもの。つまり、パーソナリティーがリスナーからのリクエストハガキを読みながら、その希望する音楽を流していくというスタイルのものだ。こういうスタイルが成り立つのは、リクエストされる一曲一曲に、リスナーの思い出が詰まっていることの表れ・・・？

<リクエスト番組の活用術・・・？>

ラジオのリクエスト番組へのハガキが、離れていた2人を結びつけるというストーリー展開は、映画には時折見られるもの。そしてこの映画でも、後半それが大きなウエイトを持つが、この映画の特徴はイナ自身が兵役終了後、ラジオのリクエスト番組のプロデューサーとなっていること。

彼は、リスナーからのリクエストハガキという形をとって実は自分の番組に対して、ヒジェへの変わらぬ想いを伝え続けていたのだった。こりゃ、一種の職権濫用かも・・・？これを知ったヒジェは心を開くかと思いきや、親友のチェ・ジョンナンの診断（？）によると、ますます孤独を守る結果に・・・？

しかし、ドラマの後半には、ペンネーム「紙の国」と呼ばれる女性からこの番組に対して毎週のように、その想いをこぼしたハガキが・・・。果たしてこのペンネーム「紙の国」さんとは一体誰・・・？

<美人薄命とはよく言ったもの・・・>

『セカチュー』のヒロインの病死は映画の中での話だが、日本を代表する本格的美人女優であった夏目雅子の白血病による死亡は現実の話。しかして、この映画のヒロインのヒジェは・・・？まさに「美人薄命」とはよく言ったもの・・・。

タランティーノ監督の『キル・ビル』（03年）、『キル・ビル2』（04年）でのユマ・サーマン扮する「プライド」や、日本映画『あずみ』（03年）、『あずみ2』（05年）での少女刺客「あずみ」など、強くたくましい女性もある意味では魅力的だが、その正反対の「美人薄命」モノも、たまにはいいもの・・・？

カレシやカノ女にふられて涙したい秋の夜長には、こんな映画が最適だと思うが、どうだろうか・・・？

2005（平成17）年10月1日記